

# 「プレーパークにおける未就学児童の利用について」

115140 野原 広樹（指導教員：古瀬浩史）

## 1. はじめに

プレーパークが日本に導入されて、40 年以上が経つ。プレーパークは「子どもが自分の責任で自由に遊べるあそび場」を基本的な考え方とするため、利用の中心は小学生以上であったと考えられる。だが、筆者が数件のプレーパークを見学に行った際、未就学児童の利用が多く見受けられた。そこで、先行研究を調べてみると、プレーパークを利用する小学生以上の実態調査（梶木ら,2002）などの研究は行われているものの、未就学児童の調査は見当たらなかった。そこで、プレーパーク運営団体を対象に、未就学児童の利用状況とそれに対する対応について調査を行う事にした。

## 2. 目的

プレーパークにおける未就学児童の利用状況や、その対応について調べることで未就学児童のプレーパーク利用の現状とその要因を明らかにする。

## 3. 調査方法

本研究の対象は、NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会が作成した全国の冒険遊び場づくり一覧から、関東圏にあるプレーパークで電子メールか郵送にて連絡が可能な 71 団体とした。アンケート調査票を平成 26 年 11 月から 2 月にかけて郵送または電子メールにて送付した。その後、現場の取り組みを知る為に、回答を得た中からアンケート内容を見て未就学児童対象の取り組みを行っている「木場プレーパーク(台東区)」、「むさしのプレーパーク(武蔵野市)」、「光が丘ひろっぱプレーパーク(練馬区)」に聞き取り調査を実施した。

## 4. 結果・考察

アンケート調査では 37 団体の回答を得た(回収率 52%)。図 1 は、「プレーパーク利用者の中の未就学児童の割合」について、「0～1 割程度」「2～3 割程度」「4～5 割程度」「それ以上」の 4 段階で回答してもらった

結果である。結果は、4～5 割程度もしくは、それ以上と回答した団体が 20 団体あった。これにより、未就学児童のプレーパーク利用者が多いことがわかった。

未就学児童とその保護者を主な対象者とするイベントを行う団体は 37 団体中 17 団体あった。具体的な取り組みとしては、未就学児童の利用が多い平日の午前中に専門のスタッフを配置して対応していたり、親子での野外調理のイベントを行っている団体もあった。これらは、未就学児童とその保護者がプレーパークにくるきっかけを作るためだと推察される。

また、プレーパークにおける未就学児童の団体利用に関しては、37 団体中 25 団体が「利用がある」と回答した。その内訳としては、幼稚園・保育園の遠足や、日常的に幼稚園・保育園の散歩などでも利用されている。これはプレーパークという遊び場が認知されたこと、また自己責任で冒険遊びをするわけではない未就学児童を含む団体においても、プレーパークを利用する意義が認められはじめている結果だと考察する。

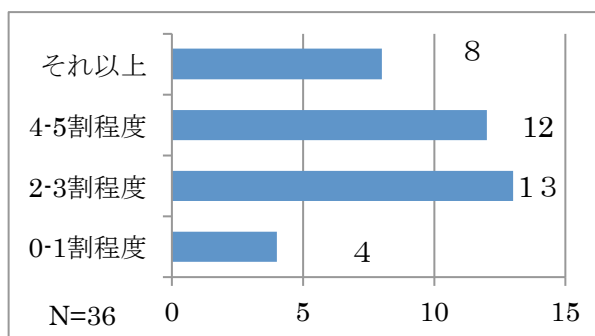


図 1. 全体利用者の中の未就学児とその保護者の割合

続いて行った聞き取り調査の結果の概要を表 1 に整理した。プレーパークごとの取り組みについて以下にまとめる。

### (1) 木場プレーパーク

木場プレーパークは、地域の有志により小学校低学年を主な対象とした活動として始まった。2011 年に江東区と協力して保育園等の未就学児童が利用する施

表 1. プレーパークでのヒアリング調査の結果概要

	調査対象	木場プレーパーク	むさしのプレーパーク	光が丘ひろっぱプレーパーク
団体概要	発足年	2007年	2008年	2003年
	運営主体	地域住民による任意団体	NPO法人	NPO法人
	運営頻度	月一回	週5回	週4回
	発足のきっかけ	地域住民の呼びかけ	自治体主導の呼びかけ	地域住民の呼びかけ
	活動場所	都立木場公園	境冒険遊び場公園	都立光が丘公園
未就学児童の割合	全体利用者の4~5割	全体利用者の2~3割	全体利用者の半分以上	
プレーパークの取り組み	未就学児童対象の取り組み	・シーツやダンボールに絵具を使って自由なアート遊び ・バーベキューコンロを囲んで未就学児童の保護者同士の交流	・週に一度、専門スタッフを配置して「のんびり外遊びの日」を設ける。	・未就学児童とその保護者のための日を設ける。 ・地域住民や保護者向けに、遊びの大切さを伝える勉強会を開催

設に、告知のチラシを置くことにより、2012年頃から急に未就学児童の利用が増え始めた。放射線の問題で外遊びが控えられたことにより一時期停滞はしたが、最近になってまた伸び始めている。現在は、全体利用者の中の4~5割が未就学児童の利用になっている。具体的な取り組みとしては、木工細工や布細工、また地域に住むアーティストと協力して、水性ペンキを使った立体アートなどが行なわれている。保護者向けには、バーベキューコンロを使って火を囲みながら、地域の大人同士での交流を図るイベントなどが行われている。

(2)むさしのプレーパーク

むさしのプレーパークでは、未就学児童の保護者がプレーパークを利用するきっかけ作りの為に、週に一度木曜日に未就学児童を含む親子を対象の「のんびり外遊びの日」を設けている。そこでは、「あおぞらランチ」という企画を行っており、参加する保護者同士が材料を持ち寄って、七輪を使って野外調理をしている。あおぞらランチを行うことで、保護者同士の交流が生まれ、児童にとっては、火おこしや料理の体験の場になっている。この様な取り組みは、児童のみならず保護者もプレーパークに行くことが楽しくなるような場づくりを目指したものである。

(3)光が丘ひろっぱプレーパーク

光が丘ひろっぱプレーパークは、2003年に開設され、最初は小学生の利用が中心だった。2008年ごろから未就学児童向けの日を設けたことにより、利用が増え始め、現在では全体の利用者の中の半分以上が未

就学児童の利用になっている。未就学児童向けの取り組みとしては、「ちびっこプレーパーク」という日を設けて、未就学児童が利用しやすい環境を整えている。また、母親向けのプログラムとして「たのしくあそんでこどもはそだつ」をテーマとした連続講座を行っている。この講座は、プレーパークの考え方や、幼児期の遊びについて理解した上でプレーパークを利用してもらうための保護者の学習の機会になっている。

5. まとめ

今回の調査を行った結果、現在関東のプレーパークにおいては、①未就学児童の利用が多い②未就学児童を持つ親の交流や情報交換の場になっていることの2つが明らかになった。未就学児童の利用が多いことに関しては、都市部の既存の公園では行うことの難しい火を使う体験や、水をたくさん使った泥遊びなどを、未就学児童のうちから経験できる場が必要とされていたことがひとつの要因だと考えられる。また未就学児童を対象とした日を設けることや、保護者向けの勉強会を開催するなど、プレーパークに来るきっかけ作りに力をいれたことも関係しているであろう。そのようにして、集まってきた保護者同士をプレーパークが積極的につなげて交流を支援していることで保護者にとっても居心地の良い環境になったことも、未就学児童の利用が多い要因の一つであると推察される。

6. 謝辞

本研究にあたってアンケートや聞き取り調査にご協力いただいたプレーパーク運営団体の方々に謝意を申し上げます。

7. 参考文献

1) 梶木典子・瀬渡章子 田中智子 森賀文月：冒険遊び場の活動実態とプレイリーダーの役割に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 237-244, 2002  
 2) 全国の冒険遊び場づくり一覧：全国の冒険遊び場づくり一覧  
 <<http://www.ipa-japan.org/asobiba/modules/textdb/>>, 2015. 2. 16  
 参照